



産経新聞

二代目の苦勞というものがあ
る。あまりに成功しすぎた父を
持つ子は、どれほど資質と才能
に恵まれていても生涯、父と比
較されて割を食うことが多い。
この点で、徳川家康と第2代

著したダニエロ・バルトリ
は、家康と秀忠の人物像を比較
しながら描いている。將軍(シ
ヨウケン)秀忠は仏僧によって
育てられたので、乳と同量ほど
の毒を吸っていた。キリストを

は「老齢で冷淡かつ理性の円熟
のため性急でなくむしろのろ
い、また温和な性格の父親」で
あった。それでも、うわべだけ
の熱心な信仰や権力への「わた
み」から、キリスト教徒に残酷
になった。とすれば、家康の
ギリスの平戸商館長リチャード

を受け継いだことを「恭敬」す
るために来日したと書いた。
その真偽は別に実証されるべ
きたが、秀忠は家康のように、
朝鮮人を彼の保護下におき、も
し他の国民がその安全を脅かす
なら外国の侵略から朝鮮人を防
護するように要望するために来
日した、とコックスは秀忠に好
意的なのだ(『イギリス商館長
日記』原文編中、1617年9
月20日条英文)。

歴史の交差点 武蔵野大特任教授 山内昌之



將軍秀忠の関係ほど歴史の教訓
にあふれている例も珍しい。何
よりも父に誠心誠意仕えた秀忠
は、人知れず二代目の苦惱を味
わったに違いないからだ。

すこぶる憎み、秀忠の「良識は
人間の半分以下、残酷さは野獸
の2倍」だとすこぶる手厳し
い。他方、亡くなった皇帝(イン
ペラートル)の内府様(家康)

「善性」をまったく持ち合わせ
ず、悪徳をすべて自分に集めた
だけだなく倍加させた秀忠はい
かなることをするか、と危惧す
るのだ(『十六・七世紀イエス
ス会日本報告集』IIの2)。秀
忠の性格の一端がバチカンにも

5)年5月、新將軍が滞在中の
伏見で能を見物していると、そ
の小者と家康の手下らが喧嘩
し、手負いや死者が多数出た。
諍(いさ)いは江戸での喧嘩の意趣返し
らしい(『当代記』慶長10年5
月3日4日5日条)。

初代と二代目の関係

家康と秀忠のように節度ある
冷静な権力継承を成功させた父
と子であっても、その末端に行
けば家臣らが衝突することもあ
ったのは興味深い。秀忠が將軍
でも示唆に富む親子の話であ
る。(やまうち まさゆき)